【学力向上フロンティアスクール用中間報告様式】（中学校用）

都道府県名	大阪

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	大阪府守口市立第四中学校					
学年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	４	３	１	１１	
生徒数	１１７	１３０	１０１	１	３４９	２２

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

①発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材の開発
②個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善
③児童生徒の学力の評価を生かした指導改善

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・１年生・数学（単純２分割、習熟度別２分割、均質均等２分割、Ｔ，Ｔ授業）
継続した研究成果を図るため。
・２年生・数学（均質均等２分割）
生徒の理解の状況に差が出やすい学年であるため。
・３年生・数学（均等均質２分割、習熟度別３分割）
これまでの研究成果と生徒の意識調査の結果から、継続して研究に取り組むため。

(2)年次ごとの計画

平成14年度	○テーマ 「基礎学力を充実させ、意欲的に授業に取り組ませる学級集団の実現のために」どのような学習小集団、学習形態がのぞましいか ○仮説 ・習熟度別授業を実施することにより、学習意欲とともに学習効果も上がると考える。 ○研究内容・方法 ・生徒一人一人の理解度、到達度に応じた指導を実現するため補充的な指導・発展的な指導など指導方法・授業形態を研究し、教材の開発をする。 ・学習意欲を喚起させ学習効果を上げるための学習小集団（単純分割少人数・習熟度別クラス編成授業）について研究し、指導方法の検討、教材教具の開発に努める。 ・各コース別（習熟度別授業）の授業の進め方・指導内容についての差違について交流し、まとめる。

平成15年度	○テーマ 「一人一人の学びに対応する学習指導とは」 ○仮説 ・個に応じた指導方法、教材の工夫・改善することにより、基礎・基本の定着と学ぶ意欲の喚起を図ることができると考える。 ○研究内容・方法 ・教師間の連携を密にし、成果の上がった実践やすぐれた理論を意見交換し、それぞれの力量を高める。 ・生徒一人一人が自己評価し、学習目標の立てやすい教材の提示・形成テスト、到達度確認テスト等の作成に努める。 ・習熟別クラス編成の各コースの指導計画・指導内容・教材の深め方を明確にしカリキュラム化する。 ・生徒各自が自己の到達段階を知り、学習目標が明確にできるため指導方法・指導内容を研究する。

平成16年度	○テーマ 「生徒一人ひとりが自分の学びをはじめるには」 ・ 生徒一人一人の学習の営みに視点をあて、生徒一人一人が自分の学びをはじめるには発表の方法や、学習した内容をいろいろな場面で活用する姿勢を学び、主体的に学習することの大切さの指導にポイントを置く。 ○仮説 ・形成テスト・自己到達度テスト等の結果の分析・評価を通して生徒一人一人の課題を提示することが全人格的な自立へとつながり、自ら学びに主体的に取り組めると考える。 ○研究内容・方法 ・評価を十分生かした指導体制の確立 ・中高一貫教育に根ざした教育カリキュラムを検討し自主教科書（数学ノート）の作成をする。 ・表裏一体の指導と評価を、少人数授業に有効に生かし、学力の保障、能力開発の指導につながる評価の方法を考える。 ・中学校の数学の学習内容の検討・精選 ・数学の授業を通して体験した思考方法、学びの喜びの実感を全人格的な自立へと広げられるよう、魅力ある授業を展開する。

(3) 研究推進体制

校内フロンティア推進委員会を校長、教頭、教務主担、数学科教員、各教科代表で組織し研究を推進している。公開授業を積極的に行い、研究・反省、今後の計画・研究の進め方について討議するとともに、各種公開授業、研究会に参加、本校の研究の参考とし、全教職員の共通理解を図りながら、学校全体で取り組む協力体制を確立していく。

Ⅲ．平成１５年度の成果及び今後の課題

１．研究の成果

３学年においては習熟度別授業を展開、どのコースも満足度の高いポイントを示していて、基礎では特に顕著であった。（別紙資料１）

２学年においては２分割授業としたが、これも５月段階で満足度の高い評価となった。（別紙資料２）

１学年では、小学校の復習の結果、四則計算の向上が図れた。また、授業形態の工夫では領域によって、２分割、２分割習熟、Ｔ、Ｔと様々な研究を進めた結果、少人数授業での「習熟ゆっくりコース」への希望が多かった。（別紙資料３）

２．今後の課題

習熟度別授業では、それぞれのコースで到達目標を設定していて、定期テストでは共通テストの実施で形成テストとなりにくく、指導の成果・生徒自身の評価をより正確に測定しうるものではなかった。到達目標の設定に課題を残している。

Ⅳ．学力把握のための学校の取り組み

１年生では、入学時のクラス分けテストの個人分析、復習課題の個に応じた指導、全学年により計算力テスト、定着度の分析を進めた。指導と評価の一体化をめざした形成的評価の研究に努めた。

Ⅴ．フロンティアスクールとしての成果の普及について

・公開授業、公開研究会等の開催

Ｈ１５年６月２３日（月）公開授業

Ｈ１６年２月　４日（水）公開校内研修　「評価を生かした指導法」

・門真市立第七中学校、熊本県出水中、宮崎県小林中、三重県からの参観

・ＨＰ作成等の工夫の実績及び今後の予定

本校ＨＰにフロンティアスクールとしての取り組みを記載。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度から新規校　■１４年度から継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級　□７～９学級　■１０～１２学級　□１３～１５学級　□１６学級

【指導体制】　■少人数指導　□Ｔ．Ｔによる指導　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　■数学　□理科　□外国語　□音楽　□美術　□技術・家庭　□保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無

特色ある取り組みの事例

(1)　指導体制の工夫

○　３年生、４月当初は習熟度別に分けずに２年生時と同じ均等２分割とした。「式の計算」領域では２年時より授業の最初に計算復習を繰り返しており、問題把握に大きな差は少ないと判断した。また、新たに３学年を担当する教師にとって全く生徒の様子や学力がわからないままの習熟度別には不安があり、まず生徒理解が先だという理由もあった。指導面では生徒一人一人への声かけ、生徒個々からの質問など個別指導に時間をとることができた。２学期、関数領域より生徒希望選択の３分割習熟度別（基礎、標準、発展）編成で授業に取り組むことにした。昨年度に続き生徒に抵抗なく習熟に分ける方法として、領域によって生徒のわかる、わからないに答えていくという形で３分割の希望をとることにした。希望の調整では、基礎クラスはできるだけ少人数で５～６人と考えていたのが希望が多く、比較的発展コースが少なかった。基礎から標準、標準から発展への移動はしても逆の移動はないように、また生徒のやる気や差別感を持たせることのないようにと考えた。生徒の反応も違和感なくスムーズにスタートできた。

　本校での少人数習熟で分ける場合の人数配分であるが、基礎、標準、発展と３コースの場合、基礎はマンツーマンで教える５～６人として希望をとったところ、基礎を希望する生徒が１０人以上となり、１０人以下に調整をした。生徒はゆっくり、わかりやすい数学の授業を希望しており、発展は難しい内容を扱うものというイメージが強く希望が少なかった。やむなく１０人以上になるよう調整をした。

○　２年生は、均等２分割授業。生徒は、１年時の普通学級授業に比べ、２分割少人数授業は先生への質問がしやすくなった、授業に集中できるなど少人数の良さを感想で述べている。

○　１年生については、入学前（小学校段階）での学力差を少しでも知りたいということで、クラス分けテスト問題の作成に当たっては九九の３，６，７段、計算領域の段階問題、基礎図形の求積、関数にしぼった。テスト結果は一人一人について正誤表を作成、各問の正答率を出し入学後の指導に備えた。しかし、２分割授業の方法については生徒理解を優先、単純２分割（出席簿順）とした。

２分割習熟別指導の実践として、「文字と式」の領域から、「ジョギングコース」「ウォーキングコース」とネーミングにも工夫をし、指導体制を変えた。コース別については生徒の希望をとり、ジョギング２５人、ウォーキング１５人とした。

　結果であるが、到達目標を同じと設定すると、少人数によるきめ細かな指導がどのコースも中途半端な形になってしまった。ウォーキングの方は、学習そのものに否定的な生徒や学習嫌い、遅進生徒が多く、１５人という人数では、一人一人に十分時間をかけることができず、指導に徹底できない場面が出てきてしまった。一方、生徒の方は、単純２分割よりは人数も少なく、ゆっくり、ていねいに教えてもらえて、質問もしやすいという感想を寄せている。

(2)指導方法の工夫・評価

○　１年生では、授業の最初に全員小学校の内容の復習に取り組むこととした。計算練習帳を使い各自ノートに復習していくスタイルで、分割クラス２０人を机間指導しながら「わからないところは聞くように」と声をかけ、小数の乗除、分数の通分に黒板説明で対応した。全員が復習できた段階で復習テストをして、まちがった問題にはコメントを書き、また説明するなどして理解・定着につとめた。再テスト調査の結果、四則計算の順序問題では９４％の生徒が正答する成果を得ることができた。

　新入生の学習状況を知るために、小中連絡会で、クラス分けテストの結果を小学校の先生に見てもらった。テスト問題の作成では到達度や課題分析がしやすい工夫をしていたので、小学校の学習過程、及び内容の定着について話し合うことができ、授業方法、授業体制の研究を小中の共通課題ととらえることができた。

○　３年生では、教材の中心は、教科書を主体として各コースごとにプリントを挿入、基礎コースでは考え方を単純化、計算問題でも整数中心で、できる喜びを感得できるよう、同じ問題の繰り返しを中心とした。発展では単なる応用問題ではなく、その概念から発展する問題（具体的には、２乗に比例以外の２次関数のグラフ、相似から正五角形の作図など）を挿入した。

　テスト問題はどのコースもすべて同じ問題とした。３年生の内申に関して同じ基準になるものが必要であることから、生徒、保護者の理解を得る必要もあり各コースごとの形成テストとはしなかった。基礎と発展の学習内容の違いによる差を埋めることはできるものではなく、教科書の内容を中心とし、基礎の生徒が確実に４割はできるものを作成した。

　評価は、基礎的な内容、応用的な内容・授業への関心意欲という観点で見た。内申についてはテスト問題が同じということで点数化されたものを並べる形で評価した。

　各コースの学習内容については、昨年に続き基礎、標準コースでは教科書に沿って展開してきた。発展の場合の学習内容をどうするのか、発展的な学習内容を教えるというのは、単に高校入試の難問を解くことができるのを目標とするだけにとどまらない数学的な考え方、見方を深める教材の発掘、工夫が必要であるが、本年度は新たな取り組みにはいたらなかった。

　どの学年でも、生徒一人一人の理解度を確実に把握するため、１時間の授業が終わっての自己評価シートを作って、学習内容を定着させるような工夫を試み、次時の復習を中心とした取り組みを行った。